

エントリーウェイ

建築家の藤森照信は、多治見のタイル産業とそれを支える大地をイメージした設計を行った。建物の非典型的な傾斜がついた形は、粘土の切り出し場を思わせ、屋根や土壁の外側には松の木が生えている。土色のファサード（建物の正面の壁）には、地元の人々から寄贈された茶碗やタイルの破片が埋め込まれている。

入口付近には、地元出身の作家、伊藤慶二の現代陶芸作品「足」が1点だけ展示されている。藤森は、建物のコンセプトを考える際、これに類似した伊藤の作品から着想を得た。彼は、天から降りてきた足が、多治見の採石場のようなくぼみを大地に残すようなイメージを持ったという。フロア（入口の階段）部分は、屋根のシャフトから降り注ぐ自然光で照らされている。作品が落とす影は、藤森がイメージした足跡を表している。

「足」のフロアからは、2階にまたがる階段がメインの展示室へと続いている。階段沿いの壁は土で覆われており、階段自体は薄暗く、登り窯の緩やかな傾斜を想起させるようになっている。階段を上がるにつれて通路は狭くなり、強制的に遠近感が生まれ、最後は4階の天窓から降り注ぐ光が爆発するかのようである。長い地下トンネルを抜けた後、明るいモザイクタイルの世界に出てくるような効果がある。